佐久市立臼田小学校　学校便り　№７　R８．１１．２　　文責　村山（教頭）

# コスモ・スクール　うすだ

一人一人が輝き　つながり　未来を拓く

## 愛おしい「学びの営み」

静かな校舎の片隅から、はっきりと澄んだリコーダーの音色が聴こえてきました。それに重なるように刻まれる、テンポ 120 の一定で温かな手拍子の音。誘われるように覗いた教室で、私は忘れられない光景に出会いました。

一人の子が、真っ直ぐな姿勢でリコーダーを構えています。左手を上、右手を下に、指の腹で垂直に音孔（トーンホール）を塞ぐ姿は基本そのものです。しかし、よく見るとその指使いには小さな、けれど確かな特徴がありました。本来ならば「卵をふんわりと抱えるように」曲げて離すはずの指が、穴を開ける瞬間、ピンと真っ直ぐに高く持ち上がるのです。そして次の音を奏でる瞬間、その指は吸い寄せられるように音孔を正確に閉じ、美しい音を響かせます。

教科書通りではないのかもしれません。しかしそれは、音楽会で美しい音を奏でたいと願うその子が、先生と二人きりの空間で何度も手拍子に音を重ね、試行錯誤を繰り返す中で自ら掴み取った、世界に一つだけの創造的な奏法。その子と先生の間に流れる濃密な時間から生み出された、表現することの原点のような姿。

音楽会当日、ステージの上で堂々と演奏する子どもたちの姿は眩しく、大きな感動を呼びました。しかし、華やかな本番の演奏だけでは見取ることのできない、泥臭くも愛おしい「学びの営み」の深さと温かさが、あの教室のひとコマには確かに息づいていたのです。あの日々の試行錯誤という過程があったからこそ、あの瞬間の音が聴く人の心を揺さぶるのだと強く実感しました。



演奏の最中、ふと視線を遣ると、ステージ上でも指揮台の上でもない場所で、その子を含めた学年の演奏をじっと見つめ、溢れそうになる涙を必死にこらえている特別支援学級の担任の先生の姿がありました。その子と二人三脚で歩んできた日々の重みを全身で受け止めるその横顔に、私までもが静かに胸を熱くし、目頭を湿らせずにはいられませんでした。

## 『はじめようコンサート』

全校の弾む声と「すてきな音」が重なり合い、今年の音楽会も開幕しました。そこに響いていたのは、単に整えられた演奏ではなく、音を通して仲間と心を響かせ合おうとする子どもたちの生々しい息づかいでした。

柔らかなレガートで奏でられた『くじらぐもにのって』の澄んだリコーダーの旋律に続き、響いたのは『うんめいだ！！』。音孔をひとつひとつ正確に塞ぎながら紡がれる一音一音には、音を鳴らす喜びと確かな意志が宿っていました。おなじみのメロディが調を変え、表情を変えていく変調曲として演奏された『ねこふんじゃった』では、軽快でスリリングな展開に客席から驚きの笑顔がこぼれます。一転して『オーレ！チャンプ』では、歯切れのよいスタッカートと手拍子が体育館を熱気で包み込みました。




声の響きはさらに深みを増していきます。「きみの夢」をどこまでも肯定するように優しく声を重ね合わせた『エール！！』。「海が見たい」という胸の奥の無垢な願いを豊かに表現した『怪獣のバラード』。そして、立ち塞がる壁に『越えてゆけ』と互いを鼓舞するように声を張り上げた三部合唱の重厚な響きがありました。

静寂を破った金管合奏の迫力あるファンファーレは、豊かなクレッシェンドとともに大空へと羽ばたく『カイト』、そして銀河の彼方へ力強く突き進む『銀河鉄道９９９』のドラマチックな響きとなって、聴く者の心を一気に引き込みました。日本の情緒あふれる「いろは」の言葉と歌声が弾む『いろはまつり』。「みんな生きてる」という生の感覚を慈しむように歌われた『まあるいいのち』。そして「どこまでも」と光の差す方へ歩みを進めるような『パレード』の伸びやかな歌声。

合奏の熱気は最高潮へ向かいます。静けさのピアニッシモから地鳴りのようなフォルテッシモへと怒濤のダイナミクスを見せた『八木節』の力強い和の脈動。境界線を吹き飛ばすようなフォルテの躍動感にあふれた『Paradise Has No Border』。そして最後の合奏『「惑星」より「木星」』では、アンダンテの優美な旋律からマエストーソの荘厳な響きへと昇華し、その場にいるすべての人の胸を深く打ちました。

万感の思いを込め、全校で「またあう日まで」と心をひとつにして歌った『さようなら』。その最後の余韻が静かに消え去ったとき、体育館は温かな拍手と深い感動に包まれていました。

ステージ上の輝かしい瞬間はもちろんのこと、一音一音を模索し、仲間と音を重ねてきたこれまでの丁寧な時間が、この日最高の響きとなって結実しました。子どもたちの歩みを温かく見守り、支えてくださった保護者の皆様、地域の皆様に心より感謝申し上げます。

## 大切なことは「栄え」ではなく「映え」

出張や研修などで担任の先生が学級を空ける日、私は子どもたちと共に授業をしたり、清掃をしたり、給食を共に食べたりする機会があります。そうした時間の中で、私が特に注意深く、そして静かに子どもたちの様子を見つめる場面があります。それは「給食」の時間です。

なぜ給食の時間なのかといえば、この時間こそが、その学級の真の実力や「学級力」を図るのにうってつけの場だからです。食欲という人間にとって最も根本的な「欲」が絡む場面では、大人の指示や管理がなくなった途端、人の弱さや身勝手さが表出しやすく、油断すれば無秩序な「弱肉強食」のような空間になりかねない側面をもっています。だからこそ私は、そうした時間にできるだけ手も口も出さず、子どもたち自身がどのようにその場を創り上げているのかを静かに見守るようにしています。

先日、一緒に給食をいただいたある学級の姿は、まさに胸を打つものでした。

給食当番の支度から配膳に至るまで、誰かに促されるでもなく、自分たちでスムーズに列をつくり、自分のことを自分で整えていく一連の動きがありました。おかわりの場面でも、決められたルールを一人ひとりがしっかりと理解し、互いを尊重しながら守っています。昼の放送が始まれば、自然と耳を傾けるなど、食べる・聴く・話すという行動に心地よいメリハリがありました。

さらに印象的だったのは、教室を満たす空気感です。必要以上に大声で騒ぐ子はおらず、遠く離れた席の友達に向かって声を張り上げるような光景もありませんでした。離れた場所の特定の子とばかり会話を交わそうとする姿の背景には、実は自分の居場所に小さな不安を抱えていたり、限られた関係の中でしか自分を出せなかったりする心の揺れが隠れていることがあります。けれどその教室には、誰もが自分の席で目の前の友達と安心して落ち着いた言葉を交わすことのできる、豊かな居心地のよさがありました。ふと足元に目をやっても、小さく散らかりがちな牛乳キャップのゴミも落ちていませんし、配膳台も綺麗に拭かれて片付けられています。



「欲」が絡み、人の目が離れる場面でこそ、その人が本来もっている立ち振る舞いや、他者への静かな配慮という「心映え」がくっきりと表れます。自分たちの過ごす空間を慈しむように自然と整える子どもたちの温かな心映え。一人ひとりのその佇まいが集合体となって現れた学級の姿には、大人が教え込むことのできない、子どもたち自身の手で静かに積み上げてきた本物の秩序が宿っていました。担任の先生がいない場面でこそ発揮されたその誇り高き「学級力」に、私は感動と、来年度から高学年となる、この子どもたちに頼もしさを覚えました。